



南塘だより

発行：弘大病院広報委員会
 (委員長：伊藤悦朗副病院長)
 〒036-8563 弘前市本町5-3
 TEL：0172-33-5111 (代表)
 FAX：0172-39-5189
<http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/>
 ※南塘とは、弘前市史によると医学部敷地内にあった南瀬池のことをいう。

2018年(平成30年)12月21日



病院長からの一言

津軽圏域に開設予定の中核病院への期待



弘前大学医学部
附属病院長 福田 眞作

2018年10月4日に、4者(独立行政法人国立病院機構、弘前市、青森県、弘前大学)による「津軽地域医療圏における新中核病院の整備及び運営に関する基本協定」が締結され、早期開設に向けた準備が急ピッチで進められています。今回の中核病院構想は地域医療調整会議の中で県から提示されたものですが、総合的には最も理想的な再編と思われます。

津軽圏域には、国立病院機構弘前病院、弘前市立病院、黒石病

院、健生病院と、200～300床の病院が4カ所も存在します。診療機能が各病院に分散しており、原疾患が軽症にもかかわらず、合併症を有することを理由に大学病院へ紹介される患者さんが少なくありません。各病院の慢性的な医師不足に加え、不十分な診療機能、救急医療の崩壊(危機的な輪番制度)等の深刻な課題を抱えながらも、大学病院がすぐ近くに存在することで、どうか圏域の地域医療が維持されてきました。新

たな中核病院は、国立病院機構弘前病院と弘前市立病院の診療機能を単純に足しただけではなく、心臓外科、脳神経外科を除くすべての診療科を標榜する予定で計画が進んでいます。診療面や教育面で大学病院との連携が強化され、機能分担も明確となる予定です。また、今後の青森県における人口の減少、年齢構成や疾病構造の特性を踏まえつつ、圏域の医療機関や地方公共団体には、がん、脳・血管性疾患や糖尿病等の地域の重要な医療課題に対処してますます積極的な連携が求められます。近隣の黒石病院、健生病院や民間病院を巻き込んだ緊密な連携や救急医療の充実を図るうえで、新たな中核病院が中心的な役割を担うものと期待されています。

2022年早期開業までの3年間、地域住民が不利益を被ることがないような診療機能の維持(特に救急医療)に、弘前大学医学部、附属病院の全面的な支援が不可欠です。関係各位のご協力、何卒宜しくお願いいたします。

各診療科等の紹介

【消化器外科】



消化器外科は腹部臓器の外科診療を担当する診療科ですが、診療範囲は食道・胃・大腸等の消化管、および肝臓・胆道・膵臓などの実質臓器と幅広いことが特徴です。年間の全身麻酔下手術件数は、約650件と多くの手術を担当しております。多くの疾患を扱うため、当診療科は3つの診療グループに分かれて治療を担当しております。食道と胃を扱う上部消

化管グループ、大腸を扱う下部消化管グループおよび肝臓、胆道、膵臓を扱う肝胆膵グループです。それぞれのグループで、日々進歩する医療技術や診療内容を積極的に取り入れて診療にあたっております。

消化器外科の診療では、特に癌診療が中心となります。近年の検査技術の発展に伴って、これまで見つけられなかった癌を検出することが可能になっております。「二人に一人は癌と診断される」という時代になり、外科治療を必要とされる患者さんも増えております。手術は少なからず患者さんに負担を強いるものであります。その負担をなるべく少なくさせ、より早く社会復帰していただくことを当診療科の目標としております。その方法として、腹腔鏡手術の積極的な導入や術後の早期復帰プログラムの導入などが挙げられます。以前に比べ患者さんの負担は格段に減っていると思われませんが、現状に満足することなくさらなる改善を目標に努力を継続していきたくと考えております。

日々進歩する治療法に対応していくために、当診療科では臨床研究も積極的に導入しております。患者さんに提供する治療法は、本当に妥当なものかどうかを科学的に証明することが必要です。特に癌診療の場合、治療法の妥当性は患者さんにとってより大きなものとなります。したがって、新しい手術方法や化学療法などの治療法の臨床研究という形をとって進めております。癌に苦しむ患者さんにとって、たとえ小さくとも光となり得る治療法を見つけ出すことも、当診療科の大きな目標の一つです。

消化器外科は、多くの部門の支援があって機能することができる科です。今後ともご支援のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

(消化器外科学講座 准教授 石戸圭之輔)

癌抑制遺伝子 TP53 の活性化変異が原因で起こる「新たな先天性骨髄不全症」を発見

今回我々は、京都大学医学部腫瘍生物学講座の吉田健一助教、小川誠司教授らとの共同研究により、新たな先天性骨髄不全症を発見しました。

先天性骨髄不全症は、造血幹細胞が先天的に障害される疾患の総称です。その中で赤血球の産生だけが障害されるダイヤモンド・ブラックファン貧血(DBA)は最も頻度の高い先天性造血不全症です。我々は10年ほどかけて本症の原因遺伝子の検索を進めてきました。今回は、臨床的にDBAと診断された患者さんの中に、癌抑制遺伝子 TP53 の活性化変異が原因で起こる先天性骨髄不全症を発見しました。本研究成果は、米国学術雑誌「The American Journal of Human Genetics」(103(3):440-447(2018))に掲載されました。

【研究の背景】 DBAは、貧血の他に奇形が約40%で認められることや、癌や白血病を発症しやすくなるといった特徴があり、原因遺伝子のほとんどがリボソームタンパク質であることから、リボソーム病という新しい概念の疾患であることが分かってきました。我々は、180例のDBA症例の原因遺伝子を検索し、新しい原因遺伝子 RPL27、RPS27、RPS15A を発見してきました。しかし、日本ではまだ40%ほどの症例において原因遺

伝子が分かっています。一方で、DBAの病態には TP53 が重要な役割を果たしている可能性が以前から指摘されてきました。しかし、TP53 がどのような役割を果たしているのか、詳細なところは明らかになっておらず仮説として論じられてきました。

【研究成果の概要】 今回我々が調べた症例の中に、典型的なDBAとは少し異なる2名の患者さんが含まれていました。二人の患者さんは、貧血に加え、低ガンマグロブリン血症、小頭症、高度の成長障害などの特徴がみられました。本研究では、両症例で TP53 に変異があることをみつけ、DBAに類似した新しい先天性骨髄不全症を引き起こされることを明らかにしました。

遺伝的に TP53 の変異が認められる病気で最も知られているのは、家族内にかんを高頻度に発症するリ・フラウメニ症候群で、TP53 遺伝子に880種類以上の変異がみつかっています。がん細胞の中にみられる変異はさらに多く、2万9千種類以上が報告され、これらの変異では TP53 の機能が失われます。今回、みつかった TP53 変異は活性化変異で(図1)、これまで癌などで報告されてきたものとは性質の異なるものでした。本研究ではゼブラフィッシュ・モデル(図2)やヒトiPS細胞モデル(図3)を作

成し、この変異により赤血球造血が障害されることを示しました。

【今後の展開】 本研究は TP53 の活性化変異が骨髄不全症を引き起こすことを証明しました。今後、先天性骨髄

不全症の新規治療法や癌の予防法の開発に結びつく可能性があります。

(小児科学講座 講師 土岐 力 教授 伊藤悦朗)

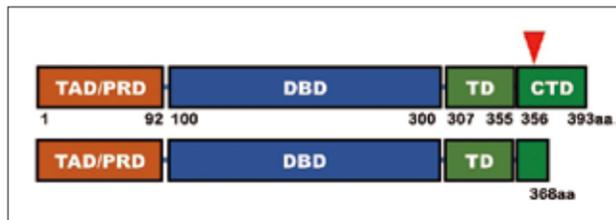


図1. 正常 TP53 遺伝子産物 p53 因子(上)と変異 p53 因子(下)の比較

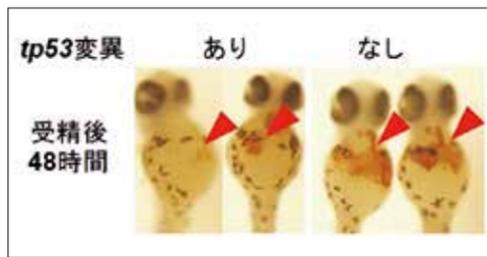


図2. ゼブラフィッシュ・疾患モデル

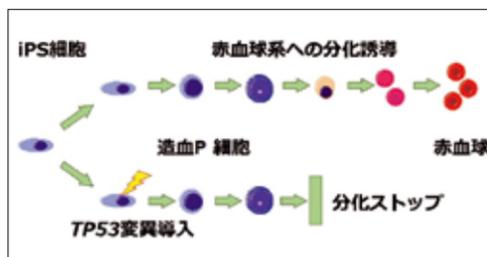


図3. ヒトiPS細胞疾患モデル

先憂後楽とは「天下の憂えに先んじて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ」(范仲淹「岳陽樓記より」)、為政者の心構えだそうです。う～ん、難しい。卑怯ですが、松下幸之助の文章を引用してみます。「…この先憂後楽ということは(中略)大切なことだと考えている。(中略)そのような時でも全く遊びに心を許してしまわず、心は常に先憂ということではなければならない。それは言いかえれば、人よりも先に考え・発意・発想することだと言える(後略)。」

しかし、あえてタイトルに反論してみたいと思います。その①「成功(楽しみ)と一緒に喜びたい!」。何故、後からこっそり楽しむ?物事を為し終えたら、その瞬間に皆と一緒に喜びたいので『同楽』。その②「憂いばかりでは、こっちの神経がやられちゃう!」。予測は大事ですが、ワクワクするような良いことも予見しましょう。だから『先見』。私たちは大学病院という組織に勤務していると、大なり小なり『リーダー(指導者)』をしばしば

先憂後楽

先見同楽



輸血部長 玉井佳子

経験します。今月のミーティング係だったり、学生や新人の指導担当を任せられたり。私達も随所で『先見同楽』できそうです。身近な一例で申し上げれば、「働き方」でしょうか。例えば1日8時間をどう使うか?レポート(記録)も書かなくちゃ、後輩の指導も。午後は会議も入っているし、今日は臨時の〇〇が入りそう…。先に片付けるのは、これ!でも、今日の予定をこなすのは物理的に不可能なので、はじめから△△さんにこの部分の分担をお願いしよう。

例えば1年をどう使うか?研究発表を一つまとめたいな。再来月は忙しいから来月までにここまで目途を付けよう…。近い先、遠い先のことを先見しながら、上手く物事が進めば達成感も満足感も得られるのではないのでしょうか。自分が出来ていないのに、偉そうなことを書いてしまいました。輸血部長を拜命し、まずは輸血部の皆と頑張ってみます。皆様も『先見同楽』いかがですか?

平成30年度 全国大学病院輸血部会議を開催して



10月18日・19日の2日間、平成30年度全国大学病院輸血部会議が青森市(リンクステーション青森)で開催されました。本会議は今年が第50回目で、96大学の国公立大学病院の輸血部門医療者が集まりました。本院輸血部が当番校となるのは、第30回(木村あさの先生)以来20年ぶりです。

18日の技師研究会には、120名を超える大学病院輸血部門の臨床検査技師が、業務量アンケート集計結果や多施設共同研究等に関して2時間にわたり活発に議論を交わしました。19日の本会議には215名が参加し、文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室の早川慶室長補佐、厚生労働省医薬・生活局血液対策課の山本匠課長補佐ならびに日本赤十字社血液事業本部から瀧川正弘経営企画部次長、遠藤正浩技術部次長、紀野修一技術部主幹の特別出席を賜りました。

会議の特別講演は3題で、早川室長補佐から「大学病院を取り巻く諸課題」、山本課長補佐から「最近の輸血行政について」、慈恵会医科大学病院輸血・細胞治療部診療部長の田崎哲典先生から「看護教育による安全な輸血医療の提

供の重要性と大学病院の役割」についてお話いただきました。その後の総合討論では、輸血卒前教育や平成30年度血液法改正、日本赤十字社への要望等に関して活発な質疑応答がありました。

実は本院は、学会認定・臨床輸血看護師が参加96校中一番多く所属する大学病院です(平成30年10月時点で15名)。多くの施設が、病院管理者(病院長、看護部)の理解が得難いことをボヤクなかで、ちょっと誇らしく思っております。この場を借りて御礼申し上げます。この場を借りて御礼申し上げます。より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

今回の会議にあたっては、川村事務部長のご英断の下で医事課・総務課の皆様には全面的なご協力を賜りました。また手前味噌にはなりますが、田中前主任臨床検査技師を含む輸血部の臨床検査技師が全力で会議の円滑な運営にあたってくれました。学会認定看護師の協力も心強かったです。ありがとうございます。

最後になりますが、御多忙にもかかわらず本会議にご出席いただきご挨拶を賜りました福田眞作病院長に心より感謝申し上げます。

(輸血部長 玉井佳子)

●●● 研修医のひとりごと ●●●

初期研修医
2年目
蓮井研悟



あり、指導医の先生のご指導のもと全力で治療に参加いたしました。が不幸な転帰となりました。私は学士編入生として弘前大学医学部に入学しており、入学前は医学研究に従事した経験もありましたが、研究者とは全く質を異にする臨床医としての責任の重さを痛感し、主治医に求められる覚悟が芽生えたように思っています。以来、現在まで common disease から希少疾患、救急まで分野にとらわれない幅広い経験をさせていただき、医学の奥深さを体感しながらスタッフの皆様からご指導を受け、非常に実り多い研修生活を送っております。将来は消化器をベースとした腫瘍内科医を目指しており、10月以降の研修科でもご指導を賜りたいと存じますのでよろしくお願いたします。

弘前大学医学部附属病院へのご寄附、 心より御礼申し上げます

ご氏名の掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。今号では、平成30年8月から平成30年10月末までの間にご入金を確認させていただきまして公表させていただきます。(経理調達課)

寄附者ご芳名

小松 笑子様

平成30年度「みんなで知ろう!がんフェスティバル」を開催

去る8月26日に、土手町コミュニティパークにおいて「平成30年度みんなで知ろう!がんフェスティバル~自分らしく過ごすためにできること~」を開催しました。このイベントは、がんの正しい知識を市民の皆様に関わりやすく提供することを目的に行われ、今年度は300人程の方々にお越しいただきました。

A会場で行われた講演では、青森県の新しいがん対策やがん相談支援センターについてのほか、ときわ会病棟の蝦名正子先生から「緩和ケア」についてお話いただきました。治療の早期から取り入れるのが大事だとのお話に、会場からも「大変参考になった」という声がありました。講演後のアトラクションでも津軽カトリストの迫力のある演技や、家で手軽にできる体操や椅子ヨガなども行われ、体験した方々も楽しんでいる様子でした。

B会場・ポム広場では、医療機関や地域、企業や患者会など、様々ながんに関連したブースがあり、それぞれが特色ある情報を提供していました。昨年度好評だった超音波体験や白衣体験などの体験コーナーは今年度も設置し、ほかに減塩だしの試飲や栄養補助食品の試食などもあり、大変盛況となっております。参加者の皆様も資料をもらったり、医療に関する体験をしたりと楽しく参加されている様子でした。

また、今回ポム広場ではプチセミナーとして、様々な医療職から10分程度の講話を開催しました。野外でのお話となりましたが、それぞれご自身が興味のあるテーマの回に参加し、積極的に情報収集



されていまして、

参加者の皆様からも「とても楽しく、勉強になりました」「どれもみんな参考になりました。毎年やってほしいです」などの感想があり、大変好評なイベントとなりました。また、本院スタッフだけではなく、地域の医療機関の皆様からも多大な支援をいただきました。この場をお借りし、がんフェスティバルへ関わって下さった皆様に深く感謝申し上げます

(腫瘍センターがん相談支援室)

第20回家庭でできる看護ケア教室を開催



10月5日、看護部主催による「第20回家庭でできる看護ケア教室」を開催し、27名の市民が参加しました。今年、「家庭でできる初期対応 I. 救急車を呼ぶ前にできること II. ひょっとして認知症?声のかけ方」をテーマに、救急看護認定看護師と認知症看護認定看護師が講義と演習を行いました。

救急看護認定看護師の講義で



り正確な手技を習得することに繋がると考えられます。

認知症看護認定看護師の講義では、認知症の人の気持ちや対応の心得などを説明し、治療については、非薬物療法の音楽療法やタクトィールケアについて、演習を行いながら説明しました。

参加者からは、「胸骨圧迫の速さと深さの感じがつかめた」、「いざという時に落ち着いて行動できるような気がします」、「認知症の人に対して偏見があったのですが、相手に寄り添って自分が出来ることをやっていたと感じました」、「認知症の気持ちが少しわかりました」等、多くの感想をいただきました。

(救急看護認定看護師 成田亜紀子)

平成30年度本町地区総合防災訓練実施

10月26日に本院5回目となる本町地区総合防災訓練を実施しました。本訓練は、これまでの訓練経験を活かし、より実践的に行うことで、教職員が災害対策に関する知識・経験・技術の体得、防災に対する意識の醸成及び知識の向上、災害時に地域の核となるべく本院の災害医療体制の検証及び災害対策マニュアルの見直しにつなげることを目的としています。

今回は、昨年度全面改訂した災害対策マニュアル及び平成30年3月に策定した事業継続計画に基づいた訓練内容としました。当日は、平日の19時頃に青森県日本海側を震源として弘前市内で最大震度6弱を記録する地震が発生し、本院建物の損壊はないものの、一部建物では外壁等の倒壊があり、停電のため非常用発電機が稼働し、エレベーターは点検が完了するまで使用不可であるという状況のもと、市内における多数傷病者を受け入れるという想定で、訓練が実施されました。訓練では、災害対策室の立ち上げ、職員の参集、初動対応者からの役割の引継ぎ、院内各施設の被災状況の把握、トリアージ等を実施し、医師、看護師、医療技術職員、事務職員及び学生等、約250人が参加する大規模な訓練となりました。参加職員からは、「実際に多数傷病者のトリアージや患者搬送等

の具体的な体験ができた」「平日時間外スタッフでの対応について検討する良い機会になった」「訓練シナリオにはない要請もあり、より現実に近い訓練となっていた」等の前向きな意見がある一方、「搬送がスムーズにいかない部分があった」「人手が多く、役割が振られるまで待ち時間がある部分があった」「事前により具体的な基礎訓練を実施したうえで総合訓練を行った方がよい」等の意見もあり、今後の課題も確認できました。さらに、今後の災害医療体制に対する具体的な提案も多数



寄せられ、教職員の防災意識の醸成及び災害時の行動の再確認が図られ、有意義な訓練となりました。今後、これらの意見を基に、更に実用的な災害対策体制を構築していきたいと考えています。

(総務課)

【編集後記】

南塘だより第92号をお届けいたします。お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様には心より感謝申し上げます。

本号がお手許に届く頃には決定していることと思われませんが、今年の新語・流行語大賞の候補は、金足農旋風、そだねー、悪質タックル等スポーツに関連したものが多数を占めました。

一方、医学界における今年最大の出来事が本庶 佑先生のノーベル医学生理学賞受賞であることは衆目の一致するところ。先生が1989年から1998年まで本学の脳神経疾患研究施設遺伝子工学部門の教授を併任されていたことをご存知の方も少なくないと思います。

平成の次の年号を迎える来年はどのような年になるのでしょうか。医療現場では、オンライン診療やAIの導入等が進んでいくものと予想されます。今年20版が刊行されたハリソン内科学の序文には、初版発行から70年間を越えても変わらないことについての記載があります。医学の進歩に取り残されることも盲目的に追従することもないようにしたいと感じています。

(病院広報委員会委員 大沢 弘)